

自殺遺族ケア 「リメンバー神戸」世話人 梁勝則さんに聞く

2006/09/04

自殺者が8年連続で3万人を超える中、自責の念や偏見などに苦しむ自殺遺族のサポートが急がれている。今年6月に成立した自殺対策基本法は、遺族ケアの必要性を明記しているが、理解は進んでいない。自殺遺族の支援団体「リメンバー神戸」(神戸市長田区)世話人で、内科医の梁(リヤン)勝(スン)則(チ)さん(50)に話を聞いた。(本田純一)

責めないで心境話して／行政の支援も必要に

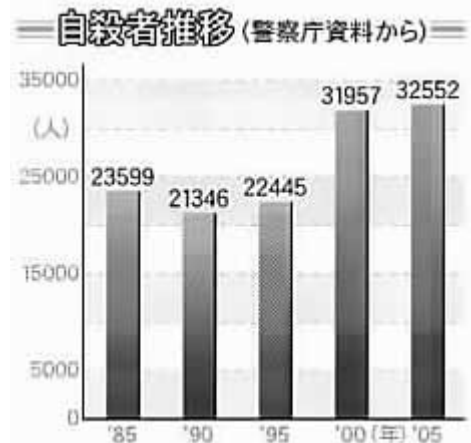
警察庁のまとめによると、昨年一年間に国内で自殺した人は三万二千五百五十二人。自殺者一人が出ると、遺族に親しい人を含めて、およそ十人を巻き込むとされ、梁さんは「自殺問題の当事者になるリスクは高い」と話す。



「自殺を止められなかった」「縁起が悪い」—。こうした批判や偏見のため、遺族は社会の理解をなかなか得られず、孤立化し、悲しみを抱え込みがちになるという。

自殺遺族は、複雑な心境に陥ることが多い。

例えば、悲嘆、怒り、自殺した家族に自分が見捨てられたという孤独感や自尊心の低下に、「自分のせいで自殺したのではないか」「止めることができたはず」などの罪悪感。





「一人で悲しみを抱え込まないで」と訴える梁勝則さん＝神戸市長田区、はやしやまクリニック

このような心理に至る背景について、梁さんは「動機や責任について、遺族が心から納得することが難しいため」と説明。「自殺の原因追究や防止は専門家ですえ難しく、たとえ家族であっても責任を負えるはずがないことを残された人は認識してほしい」と強調する。

さらに、亡くなった人を客観的に評価したり、現実には自殺を止めることが困難だったということを知ったりすることも重要という。

一方、遺族をサポートする際の注意点としては、彼らの心境を理解した上で、長期間にわたる悲嘆や怒りなどをごく自然に受け入れることを挙げる。「早く立ち直りなさい」「悲しみ過ぎたり、恨んだりしてはいけない」「早く忘れなさい」などの言葉は、遺族を一層苦しめ、精神疾患を引き起こしかねないと警告。感情を素直に出し、身内の死をしっかり受け止めるよう促すべき、と話す。



「遺族は、自らの心境を語ってほしい」と梁さん。「リメンバー神戸」は二カ月に一回、梁さんが院長を務める「はやしやまクリニック」(神戸市長田区)などで、自殺遺族が語り合う集いを開いている。梁さんは「遺族ケアは始まったばかり。問題の深刻さが、社会に十分認知されるためにも、今後は行政の支援も必要になってくる」と力を込める。

今回の集いは、二十四日午後二時—四時半、神戸市中央区の神戸市勤労会館で。問い合わせは、日本ホスピス・在宅ケア研究会事務局TEL078・642・0424

[\[BACK \]](#)